

同窓会

ニュース・レター

第2号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2003年9月30日発行



横口式石棺

富田林市宮前山古墳 7世紀

1962年に文学部国史研究室による発掘調査で出土した凝灰岩製の石棺。古墳時代後期の畿内有力豪族の埋葬形式を示す希少な資料として、大阪府の有形文化財に指定されている。

STONE COFFIN

MADE of TUFF. From MIYAZEN-YAMA BURIAL MOUND at SINDO, TONABAYASHI-CITY, OSAKA. 7TH CENTURY A.D.

横口式石棺

富田林市宮前山古墳 7世紀

1962年に文学部国史研究室による発掘調査で出土した凝灰岩製の石棺。

古墳時代後期の畿内有力豪族の埋葬形式を示す希少な資料として、大阪府の有形文化財に指定されている。

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousou78@let.osaka-u.ac.jp

新任のご挨拶

文学研究科長・文学部長
鷲田清一

1949年生まれ。京都大学大学院博士課程修了。臨床哲学・倫理学専攻。サントリー学芸賞、桑原武夫学芸賞。著書、「現象学の視線」、「モードの迷宮」、「『聴く』ことの力」他多数。

方はそれこそお盆なしの会議の連続でした。大学創設以来の大きな組織替えというところで、どの先生の机も書類の山となっておりまして。そのほか「中期計画」の作成、「教育評価」とその訪問調査の準備、(前号で紹介しました)二十一世紀COEプログラム《インターフェイスの人文科学》のプロジェクト、それに自治体関連のお仕事と、各先生、暑いこの夏も走りまわっておられました。「本業」の研究に十分な時間を割くことがとても難しくなっています。過渡期の現象とはいえ、これもまた「大学の危機」のひとつの姿ではないかと思えます。わたくしの仕事も、文学部の先生方に、「社会のなかの大学」として重要なお仕事ともに、本来の研究に少しでも多く専念していただけるような、より合理的な体制作りに取り組むことであると考えています。十年どころか百年、千年といったタイムスパンで文明と文化のあり方を考える、そういうお仕事に教員・学生ともにじっくり取り組んでいただけるような環境を整えること、そのためにしばらく「奔走」しなければ、と覚悟を決めております。

わたくし、平成十五年八月一日より文学研究科長・文学部長の仕事を務めさせていただきますことになりました。教授会ではこれまで、ちよつと服と煙草をポケットに入れて一時退出のつもりが、そのまま研究室で仕事、といったことを繰り返してきたわたくしには、ちよつと重すぎるお務めです。夏休みもお盆以外は毎日、「出勤」しておりました。わたくしだけではありません。とりわけこの夏は、来年春からの大学の法人化の準備に向けて、各種委員の先生

歌枕待兼山



『枕草子』の第十二段に、「山は」として小倉山、三笠山、三輪山、耳成山などと並べて待兼山の名が挙げられている。清少納言がこの地を訪れたわけではあるまいが、古来名高い歌枕なのである。「夜をかさねまちなかね山のほととぎす雲のよそに」声ぞ聞く(『新古今』周防内侍)などの歌も多い。『摂津名所図会』によれば、昔は「待兼川」という川まであつて、丘陵の湧水を集めて箕面川に流れ込んでいたらしい。相思相愛の男女が添い遂げられぬ身をはかなんで心中した説話も残っている。本当かしらん？まあ、そんな想像を掻き立てる土地柄だったのである。

私がこの待兼山界隈に暮らし始めたのは小学生のころからだから、もうかれこれ五十年になる。グランド脇の乳母が池は五十年前には鬱蒼とした雑木の茂みに蔽われていて、水深五、六mの底を泳ぐ魚影がくつきりと見えるほど透明だった。台風のあと、五十センチはあろうかと思われる真鯉が岸に打ち上げられていたこともあった。

その後どんな校舎の新築が進み、木は切られ、山は削られ、池は埋められた。今は、遠い日の「歌枕待兼山」の面影は、医短跡地にわずかに残るのみである。それだけに医短跡地の滴るような緑は、大阪大学の宝石みたいなものだ。大切に護りたいものである。

(林 正則)

◆ フランス文学研究室の五十年

阪大文学部が創設されたのは一九四八年その時は哲学、国史、国文、英文などの七講座で、仏文は二年遅れて一九五〇年五月和田誠三郎助教授(五十五年教授)の着任によって正式に発足した。一九五五年二月に原亨吉助教授が来られて完全講座になり、以後赤木、柏木、和田と続いて現在に至っている。

和田先生、退官の年に四年生だった私はしたがって、言語文化部の諸先生を含め、草創の頃からの先生に教わったわけで、それぞれ思い出も深い。和田先生はずいぶん年を召した方のように思っていたが、現在の自分とほぼ同じお年だったのだと考えると、不思議な気がする。



昭和43(1968)年、和具宿舎内にて



平成15(2003)年、和具宿舎前の棧橋にて語り合う学生たち

草創期の気概に満ちて、しかも和気藹々の雰囲気は当時の写真にも窺われるが、いまも先生を慕う先輩が多い。仏文創立五十年を記念しての『ガリア』四十号に、歴代助手の先生方のエッセーが掲載されているので、是非それをお読み頂きたい。それぞれの時代、先生、学生、学生が髣髴とするはず。一九九七年三月の原先生傘寿、赤木先生古希祝賀の会は英独の先生がたも来ていただいて、盛大に行われ、楽しいイベントとなった。

(柏木 隆雄)

研究室今昔

◆ 社会言語学講座から日本語学研究室へ



平成元年(1989年)日本文学(言語系)4月恒例の記念撮影

文学部のなかでもっとも新しいというところ、留学生がもっとも多いこと、この二点が日本語学研究室の特徴です。そもそも日本語学という分野は、従来の国語学に対して、日本語を世界言語の一つとして位置づけるという立場から現れ出たものですが、このような立場を重視したのは、世界の言語を対象とする言語学と、日本語を外国語と捉える日本語教育の分野でした。文学部はこの両研究分野の動きと必要性をいち早く感じ取り、一九七五年、大学院に日本語専攻を設置しました。もともと設立当初は文化関係の二講座だけで、ことは関係の最初の講座である社会言語学講座が設置されたのは、二年後の一九七七年のことでした。日本語学研究室のルーツはここにあります。以後、一九八六年、日本学科を設置して学部生の受け入れをはじめます。同時に現代日本語学講座と日本語教育学講座の二講座を新たに設置し、日本語研究界のセンターとしての地位をゆるぎないものにしました。本館四階から日本学

棟に引越したのも、このころのことです。学生数も大きく増えました。日本語学研究室の研究の柱は、設立以来、日本語教育研究、日本語教育を見据えた日本語文法・音声研究、日本語と外国語の対照研究、方言研究などにありました。これらの研究の共通点は、二つの社会や一人の人間のなかには複数の言語や方言が併存するというアイデアです。人間が動く現代社会にあつては必然的な事象ですが、日本語ほかの言語と接触し、変容する姿を見出すことができます。外国人が話す日本語も日常的に耳にするようになりました。このような状況を背景にして日本語学研究室では、COEの一環として、海外の日本語の調査に取り組みはじめました。まずはブラジルの日系人社会です。

社会のなかでの日本語の問題を見極めつつ研究を進めることを、今後も課題とします。

(渋谷 勝己)



昭和59(1984)年「日本学専攻」の新入生歓迎会、豊中の中華料理店にて

寸感

里井百合子

最近、旧友が十年余りたずさわってきた「日本語読み書き学級」の記念文集を読む機会を得た。さまざまな事情で来日した人や日本に長く居ながら日本語が十分でない人たちに日本語を教えつつ、その間に生じてくる生活上の諸問題の解決のためにも助力を惜しまなかった様子が、受講生のたどたどしく率直な作文の行間にあふれていて、胸を打たれた。「日本語を教える」人なら私の知人の中にもけっこう居る。だが、彼女の五十代は、これら受講生達の喜怒哀楽への共感で埋め尽くされていたようにみえる。

近頃は、長寿と晩婚の両傾向からか、私の年代あたりが丁度親世代子世代双方からサポーターとしてあてにされる回り合わせになっている。旧友たちと折々交す消息の中にこの話題の無い方が稀である。子世代に

対しては自助努力を促して解決するとしても、老親の失われゆく自立能力をよび戻す術は無い。というわけで、私も含めて、介護に苦闘している人が多く、彼女も例外では無い。それだけに彼女がおこし、守った目に見えない火の暖かさや広がりを感じたいと思う。

学生時代、「非凡なる平凡人」に惹かれると彼女が言ったことを想い出す。私も夫の両親の介護で東京から戻ったが、最近同じような趣旨の地元活動に参加しているの、この控えめな体裁の文集は大変示唆に富んでいた。私はこれから「平凡なる平凡人」なりに、もろったこの火を胸に守り継いでゆきたいと思う。



里井百合子(旧姓 成子百合子)
1965年 国史(現 日本史)学科卒業
藤井寺市在住



実践生活

林家 染雀

実は私、大学に入る前から嘸家になることを目論んでおりました。よく「なんで大学まで行って芸人になったの?」と聞かれますが、本当は「芸人になるつもりやっただの!」という大学に行つたの?と聞いてほしいのです。そしてその答えはこの大学に「演劇芸能史学科」があったからで、私にとってここは誠に居心地の良いところでした。研究室に行くといつも誰かがいました。みんな何かのジャンルに一家言持つていて、歌舞伎は誰それに聞け、文楽はあの人が詳しい、宝塚は彼女の独壇場だ、みたいなところがありました。扉を開けたとたん「この間の文楽見た?よかったわー!私、泣いてしもた!」おおよそ現代の若者の会話とは思えませんが、私には楽しい場所でした。

受験勉強をしていたとき落語に出会い、これを一生の仕事にしようと思ったのですが、今考えれば、ラッキーだったと思います。割と早くに人生の目標のようなものが定まっていたわけですから。

卒業のとき、天野先生が言われた「当講座は理論専門にやっているが、長年開講していると、理論だけの枠からはみだして実践に走る人材が出るものだ」という言葉が今でも心に残っております。私はその「傾き者」な訳ですが、身に付けた「理論」をその底に持ちつつ「実践」に励むよう日々心掛けております。



林家染雀 (はやしやそめじゃく)
昭和42年大阪府八尾市生まれ
大阪大学文学部美学科音楽演劇学専攻を卒業後、平成4年4月、四代目林家染丸に入門。平成9年度「大阪府芸術劇場推奨新人認定」平成12年度「大阪文化祭賞」奨励賞、平成12年度「なにわ芸術祭」奨励賞、平成13年度「なにわ芸術祭」新人賞受賞。

近況

卒業後、六年半のサラリーマン経験を経て、五年前から、学生時代からの夢もあって、今は独立し、主としてジャズを取り扱うインディーズレーベル、ガッツプロダクション(URLはwww.gatspro.com)を立ち上げました。みなさんは「ジャズ」と言つと、アメリカ

笠井 隆

ジャズのインディーズレーベル、「ガッツプロダクション」を五年前から設立。

これらの活動と新譜情報は「ジャズ専門誌」『スイングジャーナル』をはじめ、いくつかの音楽雑誌で定期的に紹介され、タワーレコード、HMV、新星堂等のレコード店でもお買い求めになれます。また、FM東京の関連会社、ミュージックバード(聴くにはチューナーとアンテナが必要。URLは<http://www.tfm.co.jp/MB>)で、毎週水曜日22:00~23:00のレギュラー番組「ジャズ万歳!」を持っています。各地の「コミュニティFM」でも配信されていることがあります。

卒業生



魚の食べ方

大野篤一郎

一九六三年秋に、ハイデルベルク大学に留学し、初めて面会時間にカール・レーヴィット教授に会ったとき、先生が私にした質問の二つは、「ドイツの食事は食べられますか」というものだった。ユダヤ系ドイツ人の先生は、ナチ時代に四年間、東北帝大で教えていたので、日本人にはドイツ風の食事があまり向いていないことを知っていた。そのとき、わたしは、「ええ、食べられます」と答えたが、実際は、学生食堂の食事にうんざりして、週末になると、下宿で自炊するほうが多かった。

あるとき、お昼ごろにたまたま大学広場でレーヴィット先生に出会った。「お昼をご馳走しよう」と言われた。フォルクスワーゲンで先生を迎えにきた奥様と三人でネッカー川を遡って、ネッカール・シユタイ



大野篤一郎
1955年、阪大文学部卒（哲学哲学史専攻）。1963年11月から1966年3月までハイデルベルグ大学留学。1967年から1998年までに神戸女学院大学文学部に勤務。1998年から2003年まで神戸山手大学人文学部に勤務。最近の仕事：『ディルタイ全集』第三巻（法政大学出版局）を大阪女子大学の丸山高司教授と共同監修。

ナツハのあるレストランで鱈料理をご馳走になった。これも日本人が魚を好んで食べることを知っていた先生の配慮によるものだった。私は蒸した魚の身をナイフとフォークで切り取っていきなり口に入れたが、先生ご夫妻はまずナイフとフォークで魚の骨と身を綺麗に切り離し、頭と骨と尾びれとを皿の縁に寄せてから、おもむろに魚の身にソースをつけて口に運ばれた。その時、初めてドイツ人がいつびきの魚をまるごと食べる時には、魚をまず解剖処理してから食べるものだということがわかったのだ。

ボランティアで充実した毎日

山崎維久子

ずっと専業主婦をしておりませんが、子どもたちが成長するにつれ地域のいろいろな役を頼まれるようになり、忙しくしております。

まずは十年間、地元八尾市の体育指導員をやっていました。ちょうどソフトバレーボールがポピュラーになりかけの時で、夜間小学校の体育館を借りてスポーツ教室を開いてソフトバレーボールの普及に努めました。

それから創設されたばかりの主任児童委員という役につきましました。主任児童委員といってもご存知の方はほとんどおられないと思いますが、民生委員児童委員の中の二つの制度です。核家族化、少子化の現代、家庭における子育て機能の著しい低下が叫ばれています。子どもたちの養



山崎維久子（旧姓 田中維久子）
昭和43年文学部西洋史学科卒業



育は家庭の責任でというよりも、社会全体の力で育てていくという認識が広く一般的になってきております。わたしは八尾市が開いている子育てサロンや、幼稚園が就園前の子どもたちとお母さんを対象に行っている「わんぱく広場」などへの協力や、八尾市教育委員会が子どもたちのために発行している情報誌の編集や、ホームページの作成に携わっています。

また、障害児者自立支援のためのNPO団体で週二回ボランティアもやるなどして、充実した毎日を送っております。



筈 隆
1967年大阪市生まれ。平成4年3月大阪大学西洋史学科卒業後、(株)リクルートに就職。その後、独立し、現在に至る。今年6月には、東京・大阪で開催されたヨーロッパ・ジャズの祭典「シナジー・ライブ」に、ガッツプロからもCD発売のベルギーの女流ピアニスト、ナタリー・ロリエ・トリオが来日。いよいよアーティスト招聘にも今後力を入れたい。

のてシヤズのみならず、幅広く音楽に興味がある方は、ぜひ聴いてみてください。日本でのジャズ熱の復活に邁進しています。



(泉 寿夫氏による乾杯、前列中央 石原 実会長)

◆文学部同窓会レポート

五月五日、肥後橋センチュリークラブにて行われた文学部総会の様子をお伝えします。

うるわしの五月に
総会・懇親会に出席して

同窓会に参加して

泉 寿夫 昭和三十八年卒
哲学科社会学専攻

二年ぶりの文学部同窓会が五月五日肥後橋のセンチュリークラブで開かれた。前回は阪大創立七十周年記念行事と同時に開催されたので、約二百名の参加者があった。今回は約七十名と少なく、しかも我が三十八年卒は桃山学院大学教授の北川君だけで二寸寂しい。昨年定年退職し、週一二回、観光産業論の講師として時間を割くだけで、極めて自由な身となった。全ての時間を趣味に没頭するわけでもなく、また新しい事業を始めることもなく、次第に来し人生の軌跡をたどる時間が多くなった。待兼山の四年間は私にとってどんな時間でもどんな意味を持つのだろう。卒業後四十年経過したが社会生活を決定つけた何かを学んだだろうか。確かな事は、青春時代の大いなる昂揚期であり、振り返ると人生で最も素晴らしい四年間であった。

先輩の研究や日常の近況報告を聞き、懷徳堂のビデオを見興味だけでは惜しい先輩のコーラスを聞き、大変賑やかな同窓会であった。

今後同窓会は三年に一度開催されるそうだが、友人、先輩、後輩と学生生活を回顧するだけでも残る人生が豊かになる。次回も元気な身体で参加したい。



(ヴァーチャル「懷徳堂」CGの上映)

気楽な、いい会でした

大館 隆雄 昭和三十二年卒
史学科専攻

昭和二十七年に旧制浪速高校の学舎に集った文学部三十人は、今でも隔年に「まちかね会」と称して集まることとしていますが、今度の文学部同窓会には、私と共にその会の世話人を仰せつかっている川崎女史がアトラクションとして歌唱を披露すること。されば駆け付けぬわけには参らず、出席しました。

会場の設営もよろしいし、私のように民間企業でアクセク務め上げてきた人間には肌合いがどうか、との懸念もありましたが、なかなか和気霽々。石原会長さんのお人柄にもよるのでしようね。

私にとって待兼山とは、当時片田舎から出てきた紅顔の

美少年？が強烈なカルチャー・ショックを味わった場所ですが、この場所の体験を共有している人たちの集まりというのはいいものでした。川崎女史も参加者の年恰好に合わせて、郷愁を誘うような曲を選んでくれました。もう古希なのに、見事な声量でした。

お世話なさんかた達のご苦勞は大変なことと存じます。ぜひぜひ永続するとともに、毎回参加者が増えますことを祈って・・・



同窓会の大切さを思う

杉本 憲司 昭和二十九年卒
東洋史二回

先日の久しぶりの会、楽しく過ぎることができました。幹事の皆様のおかげと感謝いたします。また、その際に発言を求められて、小生の周辺のことを話しましたが、ここで少し後日談を追加しておきます。わが佛教大学のアジア宗教文化情報研究所長代行（すでに、定年を過ぎていますので）として、建物（研究施設、展示部分、劇場部分）の建設とともに、すでに何人かの同僚と研究・調査にかかっています。年

が年ですので、多くの人々の助けを得てを進めています。その際感じますことは人と人のつながりがいかに大切かということ。阪大の同窓の連中がそのなかにいて大いに助かっています。同窓会は、このような人間関係をつくるのに一番よい場所だと思っています。専攻学科ごとの集まりもよいものですが、専攻の異なる人々の集まりも、異種間の情報交換ができて、何か新しい面が開かれてくるように思いますので、今後も、文学部同窓会、できれば、待兼山同窓会のような文系の集まりも、案外面白いのではないかと考えています。



（総会で総務報告を行う服部典之幹事）

心が通じ合って生まれた一体感

川崎 英子 昭和三十一年卒
英文学専攻

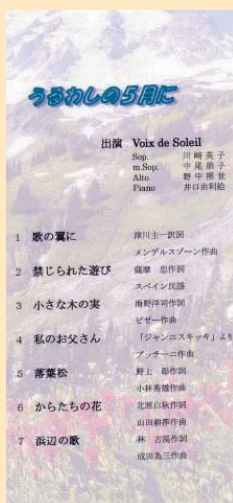
エンターテイメントに何か歌をと依頼を受けたとき、同窓会総会は五月五日とのことではひらめいたのは「うるわしの五

月に」。ハイネの詩によるシューマン作曲「詩人の恋」の第二曲です。ヨーロッパの五月は、長く暗い冬のあと、花も緑もいつせいに萌え出でて春の喜びを謳歌すると聞いています。日本の五月は少しずつ彩度明度の異なった緑色。何か少し違うなと瞬間違和感は持ちましたが、コンサートのタイトルはそれで強行することになりました。そして中身たるや格調高きタイトルに似てもつかぬ平易な愛唱歌集。

お食事と会話を楽しみながら合間にちよつと聞いていただけたらと思っておりましたら、さすがが紳士淑女ばかりの文学部同窓生。皆さんまじめに耳を傾けてくださいました。聴いている人も歌っている人と一緒に、ホール全体が歌声に包まれて心が通じ合って生まれた一体感は感動的でした。



（ヴォワ・デュ・ソレイユによる演奏、左端 川崎英子さん）



事務局 便り



附属図書館より西側を望む。
1980(昭和55)年3～4月頃

●お詫びと訂正

◆『ユーズ・レター』第号八ページ、事務局ユースの同窓会会費について、過去の会費納入の有無が十分には確認できない旨を記載いたしました。事務引継ぎの不備から生じた事実誤認でしたので、お詫びとともに訂正させていただきます。会費納入の有無については、帳簿上確認することができました。以前に事務を預かってくださった方々、またすでに会費を納入いただいている方々に、大変ご迷惑をおかけいたしましたことを深く陳謝いたします。

◆『ユーズ・レター』第号七ページ、文学部の二〇〇二年四月一日現在の組織図には、一部記載の間違ひがありましたので訂正させていただきます。

・中川順子氏 (誤) 東洋史助手 → (正) 西洋史助手(現在は熊本大学教員)

◆返信はがきにて『ユーズ・レター』の購読料を質問された方が多くいらっしゃいました。前号に明記しておらず、申し訳ありません。『ユーズ・レター』は無料でお送りさせていただきます。前回は、前回購読を希望しない」を選択した方でも、二報頂ければお送りさせていただきます。今回も、全員に郵送しました。ただし次回からは、郵送希望の方だけにお送りします。

◆名簿について

二〇〇二年度版『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』の購入をご希望の方は事務局までご連絡ください。卒業生・修了生に限り販価(四千元)＋送料(二百九十円)でお送りいたします。終身会費(二万円)をお支払いいただいた方には無料でお送りいたしますので、通信欄に名簿希望の旨、お書き添えください。二〇〇三年三月以降、終身会費または寄付金をお支払いいただいた方で、名簿を希望される方は、その旨事務局までお知らせください。数に限りがありますので、品切れの場合はご容赦ください。

口座番号 09401179043
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

●お願い

住所変更の際には、必ず同窓会事務局まで二報ください。その際、名簿へ住所・電話番号の記載を希望されない方は、その旨お伝え頂ければ承ります。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

事務局への連絡はメールで、あるいはお手数ですがお葉書にてお願いします。

●募集

◇『ユーズ・レター』の「卒業生の近況」への投稿を募集しております。

写真一枚と、原稿用紙枚(四百字)程度の原稿を、事務局までお送りください。よろしく願います。

◇同窓会の名称を募集しております。採用者には図書券一万円分を贈呈。

次のような名称が現在寄せられております。

『待兼山・鰯の会』(あるいは『待兼山・わいの会』)・『待兼ワニ』・『大阪大学待兼文学会』以上、皆様からのご応募、お待ちしております。

●Q & A

Q・あの「待兼ワニ」はどこに展示されているのでしょうか。

A・大阪市立自然史博物館(〒54610034 大阪市東住吉区長居公園1-23 TEL 061669716221)にレプリカが展示されています。

●事務局メンバー

事務局長：林正則(S四十二) 総務：服部典之(S五十六) 会計：和田章男(S五十五)
企画・立案：岸田知子(S四十五)、志水紀代子(S四十)、宮本孝二(S四十八)
広報：入江幸男(S五十二)、大西愛(S四十) アルバイト職員：武内正美(H十二)

●住所：大阪大学文学部・文学研究科同窓会：豊中市待兼山町一番五号 〒560-8532
●ホームページアドレス：http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/
●事務局メールアドレス：dousou78@letosaka-u.ac.jp



1966(昭和41)年4月当時の豊中キャンパス。
この年、2階建てであった附属図書館が4階建てになった。